

サンゴのホワイトシンドロームとキモガニ

White-syndrome and a symbiont crab *Cymo melanodactylus* on coral



数年前から慶良間でホワイトシンドロームの被害が出ている。それは、サンゴ群体の一部から始まった組織の壊死が、隣接する部位に広がり、やがては全体を死に至らしめるもので、テーブル状ミドリシに特に多い。2007年春に見かけたハナバチミドリシ *Acropora cytherea* は、すでに群体の半分ほどが死亡していた。病変部をじっくり観察しようと目を凝らしたところ、その枝の間にはおびただしい数のキモガニが生息していた。特に高密度だったのは、死亡直後の部位を含む病変部で、逆に、死亡後かなり時間がたち藻類が生えて黒っぽくなった部位、それからサンゴの健全な部位には、まったくいなかった。実は、こうした現象は初めてではなく、1998年の白化により被害を受けたハナヤサイサンゴなどの群体に普通はいないはずのキモガニが大量に生息していたという報告 (Tsuchiya M (1999) *Galaxea*, *JCRS* 1: 65-72) がある。サンゴの絶対的共生者と考えられているキモガニだが、両者の関係は、そう完全に固定されたものではなく、もしかしたら、キモガニは弱ったサンゴに集まる性質があるのかもしれない。

採集・撮影：岩尾研二
観察・採集日：2007年4月25日
場所：阿嘉島マジャノハマ

編集後記

編集 岩尾研二 (研究員)

「完全な動物相を記録しておけば、何十年先に行われる同様の調査と対比して、地球規模の環境変化を指示する有力な資料となるであろう」という故元田 茂先生の言葉に勇気づけられて、阿嘉島臨海研究所で行われた海産動物相調査についてまとめ始めたのが5年前でした。そして今号には、佐波征機さんやLarsenさんたちのお力でヒトデ相とタナイス相について掲載することができました。しかし、一歩進むことができうれしい気持ちになる反面、まだまだ未調査の分類群も多く、最近の慶良間のさんご礁の荒廃の様子を見ると、調べる前に姿を消してしまう生き物も少なくないだろうと悲観的な想いに駆られる時もあります。ただ、すべてが悪い方向に向かっているわけではありません。島の人たちの自然を大事に思う気持ちは、ますます膨らんできていますし、場所によってはサンゴ群集にも回復の兆しがあるようです。今年2008年の夏で、阿嘉島臨海研究所が設立されてから、丸20年になります。慶良間全体に豊かなさんご礁が戻ってくるのは、すこし先かもしれませんが、20年間も見つめ続けてきたのですから、これからもさんご礁の回復の様子を辛抱強く見つめ、そして自然や生物について考えていきたいと思えます。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875

E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>